

【書評・紹介】

クレール・パオラッチ、西久美子 (訳)

『ダンスと音楽 躍動のヨーロッパ音楽文化誌』

(アルテスパブリッシング, 2017年, 300ページ+索引, 2,200円+税, 第1版)

井上 淳生

本書で描かれるのは、西洋社会におけるダンスと音楽の関係史である。「ダンス」と「音楽」という、一見するとその親和性が自明に思われる2つの領域が歴史的にいかに関わり合ってきたのか、あるいはいかに引き離されるようになったのか、そして再びどのように結び付けられようとしているのか。これらの点が、豊富な実例をもとに論じられている。

著者のクレール・パオラッチは、現在、パリ音楽博物館で講師を務める若手の音楽・舞踊学者である。彼女には、18世紀から現代に至るまでの多様なジャンルの踊り手を取り上げた『伝説的な舞踊家たち』(未邦訳、2015)があり、歴史学的な視点から西洋のダンスと音楽の関係を描くというのが著者の考察の特徴となっている。

本書の元となっているのは、国際的な音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ (La Folle Journée)」<sup>1</sup>の公式本である。音楽祭創始者のルネ・マルタンが著者に執筆を依頼して出来たものである。舞踊と音楽を同時に視野に入れる研究(舞踊=音楽研究)が取り込まれるようになっている現在<sup>2</sup>、本書のように両者の関係史を通覧できる著作は極めて貴重である。

目次構成は以下の通りである。

はじめに 音楽とダンス

古代ギリシアの「ムーシケー」ー音楽とダンスの段階的分離へ／音楽とダンスー独立しながら補完し合う芸術／原初の調和を求めて

第1章 行進

音楽と行進／軍隊行進曲と儀礼用行進曲／クラシック音楽のなかの軍隊行進曲と儀礼用行進曲／結婚行進曲と葬送行進曲

第2章 中世の舞踊から宮廷舞踏会へ

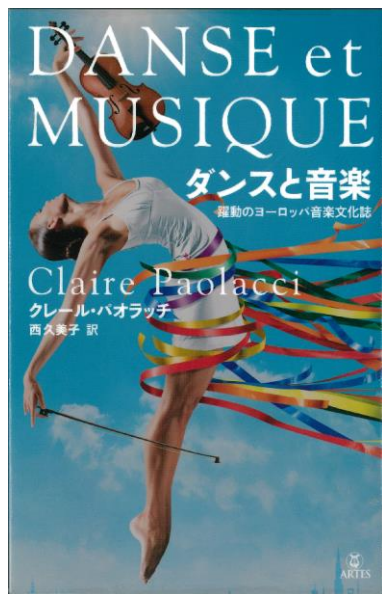
踊るための音楽／宮廷舞踏会の誕生／ヨーロッパを席卷した舞踏会／器楽曲ー「踊る」ダンスから「聴く」ダンスへ

第3章 舞踏会から演奏会へ

宮廷舞踏会からダンスホールへ／十九世紀後半から二〇世紀までの舞踏場／オペラ、バレエ、管弦楽曲に登場する舞踏会

第4章 ダンスとナショナリズム

民族の蜂起を支えた音楽とダンス／国の威信を高めた音楽とダンス／アメリカ大陸の



## 国々とアイデンティティの目覚め

### 第5章 舞踏会から劇場へ

幕間劇から種々の舞踊スペクタクルへ／音楽劇のなかのダンスとバレエ／近代バレエの誕生へ／二〇世紀初頭－モダン・バレエの萌芽

### 第6章 音楽とダンスの関係－融合、従属、独立

作曲家にインスピレーションを与えたダンスの例／舞踊家にインスピレーションを与えた音楽の例／音楽とダンス、それぞれの独立へ向かって／音楽とダンスの完全なる独立  
おわりに ダンスは音楽、音楽はダンス

一見してお分かり頂けるように、古代から現代に向かう時間の流れに沿って、ダンスと音楽の関係の変遷が描かれている。以下では、目次構成に沿いながら本書の内容を紹介していく。

「はじめに」では、古代には詩・ダンス・音楽・歌・劇が、互いに不可分なものとしてとらえられていたことが示される一方で、ローマ＝カトリック教会による詩・音楽・ダンスの段階的分離が指摘されている。なかでもダンスは「悪魔と結びつくもの」として、初期から教会権力によって否定されている<sup>3</sup>。

第1章では、最も基本的なダンスの形式であるとともに、あらゆるダンスの原点となる「行進」が取り上げられる。行進には、軍隊行進曲、結婚行進曲、葬送行進曲の他、劇作品中に使用される行進曲等、多様な種類があるが、全てに共通するのは、生身の人間の歩く（移動する）速さに即したものである点および、2拍を基本とする一定のリズムパターンである。ここでは、多種の行進曲を素材に、身体の動きと行進曲の関係が描かれている。

第2章では、宮廷の舞踏会がダンスと音楽の場へと整えられていく様子が示されている。中世には、舞踊家と音楽家が明確には区別できないほど緊密に結びついており、各々の得意分野によって「音楽も奏でる舞踊家」、あるいは「ダンスも踊る音楽家」と称されていた。舞踊家であるとともに音楽家でもある「アーティスト」によって取り仕切られる宮廷の舞踏会は、12世紀の騎士道文学の中に登場し、16世紀のフランスで最盛期を迎えたという。祝宴を取り仕切る者による「教則本」はこの時期に登場している<sup>4</sup>。

第3章では、ダンスの場が舞踏会から演奏会へ移る経緯が描かれている。この時期を特徴づけるのが社交ダンスの流行である。ウィーン会議（1814年～1815年）を大きなきっかけにして、「ダンス熱」がヨーロッパ全土を席卷する。その後、ドイツ語圏のレントラーやフランスのヴォルトを起源とするワルツ、ラグタイム（ジャズの前身）を母胎としたスウィングやリンディーホップ、中南米のタンゴ、ルンバなど、現在にも名が通じる種々の社交ダンスが、ダンスと音楽の関係史を駆動した。

第4章は、ナショナリズムの観点からダンスの変化が語られた章である。ショパンによるポロネーズ、マズルカに代表されるポーランド舞曲、リストによるハンガリー狂想曲が取り上げられ、音楽とダンスが人々の娯楽のためというよりは、民族的アイデンティティと結び付けられていく経緯が描かれている。

第5章では、舞踏会を凌駕しはじめた舞台芸術に焦点が当てられている。そのなかには、「史上最高のバレエ団」とも言われた、セルゲイ・ディアギレフによるバレエ・リュス<sup>5</sup>も含まれている。ロマンティック・バレエ、クラシック・バレエを批判的に継承したディ

アギレフは、それらを興行に堪えうる一大スペクタクル（総合芸術）としてダンスと音楽を結びつけた。

第6章では、20世紀初頭から現代に至る、ダンスと音楽の関係をめぐる様々な試行錯誤が紹介される。たとえば、「踊れない音楽はない」と主張し、踊るために書かれていない音楽もダンスの対象にしようとしたイサドラ・ダンカンやミハイル・フォーキンの例や、ミニマルミュージック<sup>6</sup>とダンスの関係を模索したスティーヴ・ライヒやアンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルの例、その他、無伴奏のダンス等、ダンスと音楽の間にある、時に緊張感のある関係が、具体的な踊り手や楽曲提供者の取組を通して描かれている。

完結部となる「おわりに」では、時間にも空間にも属する2つの芸術領域は、これまでもこれからも互いの関係を更新し続けていくことが展望として指摘されている。

以上、各章を簡単に紹介してきたが、本書を一読して感じるのは、事例の豊富さである。次々に紹介される踊り手、音楽家、作品名の数々に圧倒され、西洋の舞踊音楽史の渦に身を置いている感覚になる。とりわけ思い知らされたのは、ダンスと音楽の関係が実践家や理論家らによってかくも長く議論されてきたという事実である。そして、両者の関係が今なお問い直され続けているという事実である。

以下では、本書に触発されて評者が想起した点をいくつか示しておきたい。

筆者によれば、中世から17世紀に至るまで「テルプシコラーの芸術」（ダンス）と「エウテルペーの芸術」（音楽）が密につながっていたが、19世紀になるとダンスと音楽の関係は「完全な断絶」（p.16）を迎えたという。その最大の理由として、両者における技術の高度化（超絶技巧化）を挙げ、かつてはダンスと音楽の素養が1人の人間のなかに共存していたのが、「もはやひとりのアーティストが、演奏者としてダンサーとして卓越したレベルに達することができなくなった」（p.16）ことを指摘している。ダンスと音楽は専門分化されたのである<sup>7</sup>。

この点について、評者は自身のフィールドである社交ダンスに関して、ある調査協力者を思い出した。それは、「踊れない音楽はない」と、まさに本書にも登場した言葉と同じことを評者に対して述べた愛好家である。彼は、現在の社交ダンスにおいて、踊り手の多くがあまりにも「音楽を踊っていない」ことに問題意識を持ち、その一方で、社交ダンス用に演奏する音楽家達が踊り手に向かって演奏していないことに不満をもらしていた。彼によれば、踊り手（プロも含め）はもっと音楽を聞くべきだし、音楽家はもっと踊るべきだというのである。

評者は本書を読み進めるなかで、しばしばこのことを思い出していた。図らずも、彼は本書の著者と同じように、そして、本書で紹介された踊り手や音楽家と同じように、ダンスと音楽の関係を問い直そうとしているのだと評者は思い至ったのである。ダンスと音楽の関係に関心を寄せる一学徒として、評者は彼のような実践家の言動の重要性を改めて実感した。

ダンスと音楽の関係を問い直しているのは、高度な訓練を受けた「プロ」の踊り手や音楽家だけではない。愛好家やいわゆるアマチュアの中にも、同様の問題意識を持つ人々はいるのである。この点で、1人の人間のなかにダンスと音楽が共存することは、舞踊および音楽に関する高度な訓練の有無とは直接には結びつかないのかもしれない。

今後、ダンスと音楽の関係を論じるにあたり、何をもってダンスと音楽が「結びついて

いる」と言えるのか、あるいは、「分離している」と言えるのかについて、整理する作業が必要となる。本書の著者は、一例として、中世の舞踏会を取り仕切った「アーティスト」のように、1人の人間の中でダンスと音楽の素養が共存している点を「結びつき」の例として挙げている。評者も自身のフィールドに照らしながら作業を進めていきたい。

本書は西洋社会を舞台としているが、評者の関心は西洋以外にも広がっている。日本を含む東アジアではダンスと音楽の関係はどのような経緯をたどってきたのか、現在は何のようなもので、今後どうなっていくのか。このような思考も本書から導かれたもののひとつである。

専門分化が今以上に進み、ダンスが身体運動のみに担われる芸術、音楽が音を発することのみによって成立する芸術として、両者はますます独立したものになっていくのか。あるいは、その姿はまだ明確にはイメージできないが、1つの芸術として両者が「結びつく」場面が増えていくのか。今後、注視していきたい。

## 注

- <sup>1</sup> 1995年にフランス西部ナントで誕生した、世界最大規模のクラシック音楽祭。クラシック音楽を、専門家だけでなく、より多くの人々に気軽に楽しんでもらうことを理念に創設されている。
- <sup>2</sup> 前号で紹介した Nor and Stepputat (2016) や Eriksson and Nilsson (2010) 等が挙げられる。評者も日本の社交ダンスを対象に、舞踊と音楽の関係について論じたことがある (井上 2018)。
- <sup>3</sup> 教会権力に関連付けられたダンスの道徳性をめぐる議論は、中世から20世紀初頭に至るまで西洋社会においてしばしば登場する。研究の一例として、アメリカにおける性に関する規範とダンスの規制について論じた Wagner (1997) がある。
- <sup>4</sup> 最初期の「教則本」はイタリア半島で見つかっている。本書では、『舞踊芸術と振付法について』(ドメニコ・ダ・ピアチェンツァ)、『舞踊芸術論』(グリエルモ・エブレオ)、『舞踊芸術に関する書』(アントニオ・コルナッツァーノ)が挙げられている (p.64)。
- <sup>5</sup> 意味は「ロシアのバレエ団」。1909年に創設される。創設者であるディアギレフの死去に伴い、1929年に解散する。バレエ・リュスに数々の楽曲を提供してきたストラヴィンスキーや、バレエ団のトップダンサーであったニジンスキーを輩出している。
- <sup>6</sup> 最小限(ミニマル)なリズムパターンの反復を最大の特徴とする音楽。
- <sup>7</sup> これに対して、踊り手や作曲家達によって両者の融合が試みられている例や、独立したものとしてとらえようという例もある。

## 参考文献

- Eriksson, K. and Nilsson, M.  
2010 Ethnomusicology? Ethnochoreomusic?. *Crossing Over. Fiddle and Dance Studies from around the north Atlantic* 3: 260-264.
- 井上淳生  
2018 「舞踊と音楽の不可分性—日本の社交ダンスにおける踊り手と演奏家に注目して—」  
『Contact Zone』10、pp.41-71。
- Mohd Anis Md Nor and Kendra Stepputat (eds.).  
2016 *Sounding the Dance, Moving the Music; Choreomusicological perspectives on Maritime Southeast Asian Performing Arts*. Abingdon Oxon: Routledge.
- Wagner, Ann, Louise  
1997 *Adversaries of dance : from the Puritans to the present*. Urbana: University of Illinois Press.

(いのうえ・あつき／北海道地域農業研究所)